



所沢で広く愛される 重松流の浸透を目指して

重松流祭囃子保存会会長 **小峯 勝次**

重松流祭囃子

地域を越えて
受け継がれる重松流

重松流はよく「ジャズのような」と言われます。これは、二つの小太鼓が異なる打法で掛け合いをするからだと思えます。細かな譜面はなく、技術を口頭で伝える「口伝」が中心で、演奏者とその場の雰囲気や即興的に変奏するのが重松流の醍醐味と聞いていいでしょう。

重松流を多くの人に伝えたいという古谷重松の思いは、所沢市内に広く浸透し、「重松流祭囃子保存会」や各囃子連によって保存・伝承されています。支部ごとに工夫を凝らした山車や衣装の違いに注目してみても、重松流の楽しみ方の一つです。

「山車に乗りたい」
その思いを糧に

重松流に関わる人間にとって、ところざわまつりは年に一度の大舞台。山車の上で演奏することを目標に練習に励んできました。しかし、令和元年は台風接近のため中止に。続く二年間は新型コロナウイルスの影響でお祭りが中止になっただけでなく、練習すらできませんでした。

この空白の二年間で、それまで練習に参加していた子どもたちのお囃子離れが進んだように感じます。感



▲太鼓に見立てた木材を叩く星の宮支部の皆さん。これぞ重松流といえる、テンポの良いリズムが響きます

重松流の復興と 裾野の拡大

染状況が落ち着いてきて、ようやく各支部で練習を再開しつつありますが、二年間という月日は子どもにとって大きな成長の期間。それでも一緒に続けてくれる子どももいて、ブランドを感じさせない太鼓の叩きっぷりは、頼もしく思います。

「どんなに困難であっても、先人たちが続く伝統をここで絶やすわけにはいきません。今年こそところざわまつりが開催されると信じて、練習に精を出していきたいと思えます。

明治7年に古谷重松が入間市の久保稲荷神社に奉納した絵馬に描かれている榊には、重松流が伝えられた村名が書かれた短冊が下がっています。中には既に重松流が途絶えてしまった地域もあります。そのような地域で重松流をもう一度復興させる



▲次代を担う星の宮支部の子どもたち。お母さんのお腹の中にお囃子をお腹に聞いていた子ども

